

信号のない一本道を走り続けること5時間、車は脇道に入ってしまった。ガタガタガタ。アスファルトの道路とは打って変わり、土の道はこぼれ道を進む。この先に本当に日本人がいるのだろうか。そんな不安を抱かざるを得なかったが、しばらくするとレンガ造りの建物が見えてきた。子どもたちが駆け回っているのが見える。どうやらあそこが学校らしい。車を止めると、日



バンダさんの苦手の発音を何回も練習。個別指導は分かりやすいと生徒たちから大人気だ

どの小さな国。給水や発電施設、道路などのインフラ整備が遅れ、主要な産業もない。一人当たり国民総所得（GNI）は、日本の150分の1ほどだ。日本は1971年の青年海外協力隊の派遣に始まり、かんがい施設の整備や井戸の掘削、学校建設や教員養成などを支援。40年以上にわたり、その協力の中核を担ってきたJICAボランティアは、これまで1600人以上が農業、医療、教育など幅広い分野で汗を流してきた。

本からの来訪者が珍しいのか、子どもたちが集まってきた。カメラを見つめるやいなや、お気に入りポーズをとる。「撮って！」とは言わず、しきりにカメラを指差しては、シャッターを押すしぐさをする。「この学校に通う生徒たちは耳に障害を持っています。音が聞こえずうまく発音できないので、あまり言葉を発しません。そう教えてくれたのは平井香織さん。ここで彼らの「先生」として活動する青年海外協力隊員だ。

言語聴覚士の資格を持ち、約10



地方部では水道が整備されていない地域も多い。「地元の人に教えてもらいながら、ちょっとずつ水の量を増やして練習しました」とバケツを頭に載せて運ぶ平井さん

年にわたり日本の老人介護施設や病院で働いてきた平井さん。偶然にも周りに協力隊の経験者が多く、よく話を聞く機会があった。チリで障害者のリハビリを担当した同僚からは、「近くにリハビリ施設がなく、テレビのリモコンを使って手を動かす訓練をした」と聞いた。驚きだった。「工夫次第でできることがある。私も力になりたいと思うようになりました。」ここエンバングエニ聴覚障害児特別学校には、園児から高校生まで約190人が通っている。これから同僚の先生と授業をするという平井さんについていくと、教室には教だんを取り囲むように9人の生徒が座っている。「ンゴーベ」「ペーレーレー」「カーラム」牛、羊、ライオン。先生の口の

動きをまねて、発音の練習をする。なかなか難しそうだ。苦戦している子を見つけた平井さんは、「放課後に個別指導をしましょうか」と同僚の先生に提案。「聴覚障害といっても、一人一人程度が違います。それぞれに合わせた指導が必要なんです」と平井さんは話す。この日は、グローリー・バンダさん（13）の個別指導の日。Kの音がうまく出せない彼女に、ブックやキッチンなどの発音を練習。「今日は前よりうまくできてうれしい」と手話で話してくれた。そんな様子を見てマクラード・ハラ校長は、「カオリは、生徒一人一人の発音の癖を素早く見抜き、どう声を出せばいいのか適切にアドバイスしてくれます。彼

雨期のマラウイは一面が緑に染まる

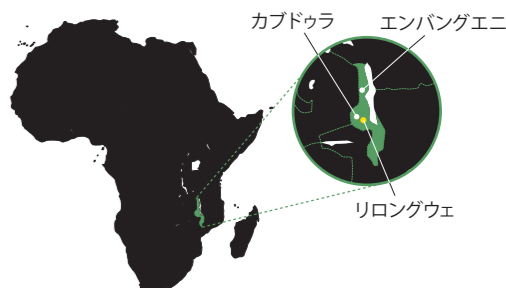
発音練習で生徒一人一人の音の違いを聞き分ける平井さん



マラウイと日本をつなぐ JICAボランティア
地平線まで続く緑の大地、そこに点在する小さな家々。色鮮やかな服を着た女性たちは頭の上に荷物を載せて歩き、子どもたちは元気いっぱいにはだして駆け回る。2月上旬、日本から丸1日かけてたどり着いたアフリカ南東部の

マラウイ。首都リロンゲウエから北へ向かう車中から見えたのは、そんなアフリカらしい光景だった。雪舞う東京から一転、雨期の真ただ中で蒸し暑い。「この国の人たちは日本に好感を持ってますよ。これまでたくさん助けてくれたから」と地元の人と話すと、マラウイは、北海道と九州の面積を合わせたほ

マラウイ
from MALAWI



手を取り合って 前に進む

アフリカ南東部のマラウイ。日本ではあまりなじみのないこの国で、現地の人たちと共に汗を流す青年海外協力隊員の活動を追った。

青年海外協力隊

写真：今村健志郎（フォトグラファー）



実験でどんな化学変化が起きるのかを講義。実験前ということもあり、真剣に聞き入る生徒たち



実験器具を整理整頓。これなら同僚の先生も実験を行いやすい

色が変わってきただよ！」という声が上がった。硫酸銅の水溶液の中で化学変化が起き、銅板の銅がスプーンに付着している。

「これは電気メッキといって、鉄がさびるのを防ぐため、別の金属で覆う方法です。ほら、このドアノブも、この教室の屋根も実はそうやって鉄を加工したもんなんですよ」と来島さん。新しい発見にみんなの目が輝く。「自分で実験すると、化学変化がよく理解できます」とロネシ・ジョサファデ

イさん(19)は楽しそうだ。そんな大人気の実験の時間だが、実は、来島さんが来るまでは、ほとんど行われていなかった。教科書の内容を説明する授業ばかりで、みんなどうしても理科が好きになれなかったのだ。「面白いからこそ、もっと知りたいと思って、分らないことにも挑戦していけるのだと思います」と来島さん。そういう彼自身も、宇宙誕生の謎について研究を続け、物理学の博士号を取得した経歴の持ち主だ。「だ

って楽しかったですから」と笑う。在学中には3カ月間、アジアを回る旅もした。「学校に行けない子どもたちに出会い、理科を教えることで彼らの人生の選択肢を広げられないかと思うようになりました」。大学院卒業後、教員の経験はなかったが、協力隊への道を選んだのはそんな理由からだ。

理科の楽しさをもっと知ってもらいたい。来島さんはそんな思いで、放課後に誰でも参加できる「サイエンスクラブ」を立ち上げた。水圧でペットボトルを飛ばすロケットを作ったり、カボチャの種類から油を抽出したりと、実験室はいつも笑いに溢れている。「今ではクラブ設立当初の倍の40人が参加するほどの人気です」と理科担当のジョン・ムテンガブンバ先生。「授業にもっと実験を取り入れてほしいと、コウタロウは使われていなかった実験器具を整理してくれたり、器具の使い方を教えてくれました」と話す。

「将来は車を造るエンジニアになりたいです」とヘネリ・ボンベくん(17)。子どもたちの夢

は広がるばかりだ。来島さんの次の目標は、近隣の学校でも理科の実験を増やしてもらうこと。すでに、7校でサイエンスクラブの立ち上げに協力し、実験の結果を発表するコンテストも開催した。「各校の先生を集めて、実験の内容や方法を学び合う研修を開こうと企画しています」。これからその打ち合わせがある、隣の学校に向けてさっそうと飛び出している。

遠いマラウイで活躍するJICAボランティア。彼らのそばにはいつも、目を輝かせた子どもたちがいた。これからもこの国の人々に夢と希望を与える存在でいてほしい。



[上]いつも元気いっばいの子どもたち。これからの成長を見せてくれるのだろう
[下]他校の先生と打ち合わせ。「次の研修では、ヨウ素液を使って、でんぶんの反応を調べる実験を紹介したい」



縫製の授業で作ったカチューシャやシュシュなどはバザーで販売。収入を得る術を学んでもらう

実験で伝える 理科の面白さ

続いて向かったのは、首都から

女が来てからみんなよく言葉が発するようになったし、他の先生たちも発音指導の技術を学んでいます」と感謝を述べる。

午後になり、今度は高校生の授業の準備を始める平井さん。「卒業後に自分の力で収入を得られるよう、手に職をつけてほしい」。隣町の協力隊員、中谷衣里さんの協力を得てミシンを使った縫製技術を教えている。今日の課題はバッグ作りだ。「ここで技術を学んで、将来は私の大好きな青い服を作りたいんです！」と、ダビダ・ピリーさん(17)は満面の笑みを見せてくれた。

北西に車で2時間のところにあるカブドゥラ中高等学校。約400人の生徒が通う学校の教室から元気な声が聞こえてきた。中でも、高学年の授業が盛り上がりつつあるようだ。

「では実験を始めましょう！」教だんに立つ青年海外協力隊員の来島孝太郎さんの一声で、6人ずつのグループに分かれた生徒たちが一斉に作業を始めた。スプーンと銅板に導線をつなぎ、電流を流したら、硫酸銅の水溶液につけてみる。

「何が起ころんだらう...」と、どの顔も好奇心でいっぱい。来島さんは、みんな実験を教えた通りできているか各グループを見て回る。

しばらくすると、「スプーンの

「コウタロウ先生、スプーンに銅が付いてきました！」。電気メッキの実験を行う生徒たち

